

---

## 詩歌・小説の中のはきもの

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

---

文学作品の中にはきものが描かれているのを見つけると、そのつど抜書しておいた。会社をリタイアした後、その抜書を整理してみても、人々がはきものを愛して下さることに、改めて感謝の思いを深めた。折りしものはきもの業界を含め、日本経済は多難な状況下にあるが、こんな時こそ、はきものが愛しきものとして描かれた詩歌などの世界に心を遊ばせるゆとりが欲しい。業界人としての感想を付して、作品を紹介して行きたいと思う。

### 1 犬ふぐり風塵の靴愛すべし

堀田正久

★作者は、佐倉藩主堀田正睦<sup>まつえい</sup>の末裔、元佐倉市長。石田波郷の「鶴」同人。佐倉藩は、藩の事業として製靴を藩士に教えた。イヌフグリは明治初年に日本に入ってきた帰化植物。靴も明治初年から日本人に用いられ、「洋靴」と呼ばれた。今やともに「帰化」したことすら忘れられるまでに定着した。春の野原に瑠璃色の小さな花を見かけたら、靴の同級生として可愛がってほしい。

### 2 この体古くなりしばかりに

靴穿きゆけばつまづくものを

齋藤茂吉

★アララギの総帥で日本の代表的歌人。老いの哀しみを靴に仮託して歌った有名な一首。歌の詠まれた昭和20年代末、靴は足幅で選べなかった。この歌を読むたびに、茂吉に大きすぎる靴を履かせたのではなかったかと、胸が痛む。今なら豊富な品揃えの中から、シューフィッターが足に合った靴を選択して差し上げられたらう。

3 江分利の服装に関するかぎり、戦後はまだ終わっていない。…靴は2足、赤1足でローテーションを組む。全部オールドックスな紳士靴…（黒の）1足はたいへんなシロモノで、もっぱら晴天用である。左足の裏に穴があいていて靴下の地模様が見える。江分利は、その靴で捨てた煙草を踏み消そうとして、思わずキャッと行って飛びあがったことがある。この靴に関して言えば 隔靴搔痒という言葉が蒼ざめてしまう。 山口 瞳

★昭和37年度下半期の直木賞受賞作『江分利満氏の優雅な生活』から。

作者は靴には特に無頓着だったと告白しているが、当時、穴のあいた靴はそれほど珍しいものではなかった。エブリマン、つまり、庶民は多かれ少なかれ「誰でも」「みんな」このような切り詰めた生活をしていたのである。

4 幼子はそら色の靴ほしがれど  
そら色の靴いまだも買わず  
中野菊夫

★淡彩の絵のような歌を得意とした歌人。昭和29年に詠まれている。小さな子供にとっても、靴は身近で憧れの対象だった。子の嘆き、親の嘆きが伝わってくる。デフレ不況下の今は、戦前戦後を通じてみれば、本当は豊かな時代なのだが、子も親もそうとは感じていないのだろう、この種の歌はとんと見かけない。

5 底厚のサンダル過ぎし私の  
ファッション曆にも痕跡ありて  
咲まりあ

★外反母趾を産み出すような幅の狭い靴や、転倒の危険のある厚底の靴を苦々しく思っていたが、若い女性にとっての靴の選択は、季節の変化にともなう衣替えぐらいの感覚なのだろう。「痕跡」となって記憶される靴は幸せだ。しかし、タバコの注意書きをまねて、「過激な履き方や安易な買い方には注意しましょう」とだけ申し上げておきたい。

6 きっちり足に合った靴さえあれば、  
じぶんはどこまでも歩いていけるはずだ。そう心のどこかで思いつづけ、完璧な靴に出会わなかった不幸をかちながら、私はこれまで生きてきたような気がする。  
須賀敦子

★『ユルスナールの靴』の冒頭の文章。作者は、昭和23年、たった一度この靴ならど

こまでも歩いていけると思うオーストラリア製の紐靴を手に入れたとき、「顔がほてった」という。だがその靴は外出に履く前に寄宿舍の戸棚から盗まれてしまった。彼女は生涯そのことを心中の小さな傷にして逝った。

7 行人よ靴いだせ  
行人よ靴いだせ  
脂ぬり刷毛はかん  
糸かがり針ぬはん  
鋏うたん  
革うたん  
靴いだせ行人よ 三好達治

★『行人よ靴いだせ』の一節。ジープが走っている占領下、靴磨きが道行く人に呼びかける。日本人の多くは萎縮していた。前進するための靴、靴という靴は例外なく前に向かって歩くように造られている。思えばその積極さのなんとけな気なことであることか。たくましく生きる靴磨きに反骨の詩人は目を止めた。

8 わが靴の  
いま穿<sup>は</sup>かんとするつややかさ、  
晝<sup>ひる</sup>近き冬の日のひかりかも。  
土岐善麿

★昭和23年の『歌集』から。善麿は靴を何度も詠んでいる。一日一回でもいいからトックリと靴の表情を見てやってほしい。電車の中で見かける汚れた靴のサラリーマンや学生は例外なく、疲れた顔をしている。靴の光沢はその人の心の余裕に比例する。靴を磨くと心が癒されるから不思議である。

9 映画や小説で、見てきたような陸軍の話として、

『軍服に体を合わせろ』

と言う場面があるが、あれは冗談で言う言葉で、実際はそのようなひどいことはしない。

…特に軍靴のサイズは、行軍の能力に大きな影響を与えるので、合わない場合には、被服倉庫へ行けば、被服掛助手の上等兵や兵長が、親切に探してくれた。

浦田耕作

★『誰も書かなかった日本陸軍』から。靴業に携わる者として聞き捨てならないことなので、およそ200人の兵役経験者に「靴に足を合わせよ」と言われたことがあるか質問してみたが、「そんな話を聞いたことはある」と答えた人ばかりであった。冗談ではなく、昭和15年、陸軍は80万人の人体計測を実施しているのである。

10 お嫁にゆきますときは、下駄箱に新しい下駄を十三足入れてゆくのが普通と書いております。わたくしも、雨降りするときの下駄、日和という歯の入れ替えのできるもの、駒下駄、塗り下駄、畳表、それに草履など夏用、冬用とりまぜて十三足の履き物を揃えてもらいました。

桑井いね

★『おばあさんの知恵袋』から。靴は百数十年の歴史を持ち、愛用されているのに、このような日本人の生浩に根を生やした慣習をもたない。その意味ではまだ「洋靴」なのかも知れない。誰でも柎目の通った、節がなく片べりしない、いい下駄の選び方を知っていた。商品知識の普及も業界人の責務である。

11 床屋去り会社員去り

洋服屋靴屋も今は退農せんとす

渡辺久二郎

★『むねん』から。地方から都会に出てきて靴店を開業したが、国力を挙げて軍備増強に物資を投入したので皮革も「統制」されて市場から消え、やむなく農業に従事した。昭和25年、待望の統制が解除されて、靴店を再開するため、都会に戻ろうとしていたのだろう。戦後靴業界の歴史はそのような苦難を乗り越えた人の困苦と喜びの上に築かれたのである。

12 お手つないで 野道を行けば

みんなかわいい 小鳥になって

唄をうたえば 靴が鳴る

晴れたみ空に 靴が鳴る

…

はねて踊れば 靴が鳴る

晴れたみ空に 靴が鳴る

清水かつら

★『靴が鳴る』は大正8年に作詞された。大正10年の野口雨情『赤い靴』と靴の童謡の双璧。大人の靴でも鳴るのがかっこよい時代があった。式典のとき、校長や来賓がギシギシと音を立てて入場してくるのに威厳すら感じたものである。今、靴が鳴ってしまっっては全てを台無しにする。

13 その人は、靴の修理に関する以外の話しをしたことがありません。また、靴の修理のできばえは、私を満足させてくれましたが、なによりも約束の日には必ず出来上がっていることが私には有難かったのです。ていねいな仕事ぶりや

約束を守ってくれることなどに感嘆しやすい体質になっているのかもしれませんが。そして、道ですれちがう時の、その人の無言の挨拶が、この世俗の日日の中ではことさら貴重なものに思われるのでした。

金井 直

★『ロリエの靴屋』から。板橋区東山町にあったその靴屋のガラス戸に「ロリエの葉をさしあげます」と貼られていて、娘さんがもってきたロリエの葉の緑と香りは、心の慰めとなり、カレーに煮込まれたのだという。店は道路の拡張で廃業した。心の交流のある商売は靴屋にも顧客にも幸せをもたらす。

14 靴は冬近き北国の空に向って整然と並んでいた。どの靴も風や水に傷んでいたが、決してねをあげたり、なげやりだったり、わがままであったりしていなかった。質朴で、忍耐強い魂の形を保っていた。夜ふけて、また能登の、町はしぐれた。私は、あれらの靴が運んで帰ったさまざまな人生を思いながら、どの夜学生の生活もまだきちんとして形が崩れていないと思えることに感謝した。

以倉紘平

★『日の門』に収められた散文詩「冬の靴」の一節。詩人は、夜間高校の靴箱の棚にきちんと並べられた靴から、持主の人生を思いやった。私は他人の足元をよく見るし、宴会などで会場の入口に脱がれた靴を見ると、思わず半敷を読んでしまう。そこに自分の会社の製品を見つけると、いつからか自然に頭が下がるようになっていた。

